学校だより　令和元年度　1月号

なつのくも

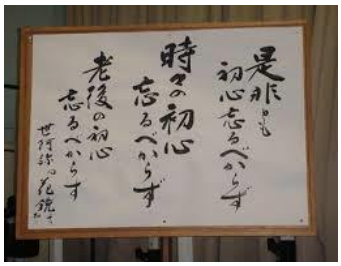
第124号（R2．1．8）　練馬区立光が丘夏の雲小学校

本校ホームページ
携帯・スマホ用サイト
でもご覧ください。

是非とも初心忘（れ）るべからず
時々の初心忘（れ）るべからず
老後の初心忘（れ）るべからず

校長　牧 野 光 洋

明けましておめでとうございます。令和２年がはじまりました。「初心忘（れ）るべからず」という言葉をよく耳にします。歳月を区切るならば、年始めの心持ちが初心にあたると思います。平成から令和へと元号も変わり、子年も干支の始まりです。新しい年が始まりました。その始まりとして、「初心」という言葉を改めて考えてみたいと思います。この言葉、元々は芸の秘伝として伝えられたものです。能を大成させた世阿弥という方が能の秘伝を記した「花鏡」の中に次の言葉を残しています。『当流に伴能一徳の一句あり。初心忘（れ）るべからず。』初めて舞台を踏んだときの緊張感とひたむきさ、謙虚な心は常に忘れてはならないという言葉です。実はこの有名な句には続きがあります。この句には三ケ条の口伝があります。初心忘れるべからずの前に、表題の「是非とも」「時々の」「老後の」が伝えられています。初心は、技の成熟度によって３つあると書かれており、修行している時期としても記されています。



第一の「是非」とは、舞が良くても悪くてもという意味で、初心者のもつ緊張感とひたむきさには人を引き込む力があり、勢いと緊張感は忘れてはならないという言葉です。教員を長年続けていて、何年経っても変わらず子供たちから慕われる教師とはどのような教師か？同窓会などで耳にするのは、教師になりたてのころに受け持った子供たちが多いと言われます。教師としての技術は未熟なはずなのに、子供たちに与えた影響は一番大きいと言われます。初心のひたむきな姿勢が子供たちの心に響くのでしょう。それからは、とにかく一生懸命に取り組んでいる姿が感じられた時代の子供たちだそうです。

第二の「時々」とは、道半ば舞台に慣れた頃の者に伝えています。どんな人間でも慣れれば余裕の中に油断と慢心が生まれます。その慢心の中に初心の緊張感を宿して舞う、それが秘伝の舞い方であると世阿弥は教えます。

第三の「老後」とは、道を極めた後という意味合いです。どんな高みに上ろうと初心なくしては一流の芸はできないと戒めています。

それぞれの道を進み芸を極めようとも、常に初心を心に宿す。極めていないのであればなおのこと、初心を忘れてはいけないのでしょう。その緊張感と勢いの中にこそ、人を魅了する花があると世阿弥は秘伝の中に書き残しています。

毎年、せわしない大晦日から、元旦に変わったとたん静寂の中でピーンと空気が張り詰めるのを感じます。お正月三ケ日には、今年はこんな事をしよう。あんな事をと意欲が溢れます。しかし、日が過ぎると共に、心も緩んでいつしか歳一の決心も薄らいでいきます。年月を１年で区切るならば、今、このお正月が初心の真っただ中。初年の心を胸に刻み、折に触れて気持ちを引き締める薬としたいものです。この初心が、荒波を越えていく力となりますように。

本年が皆様にとって実り多き始まりの年でありますように。